

- ① 射水市立金山小学校（発表時、新湊市立中伏木小学校） 教諭 森田 秀子
- ② 富山・いのちの教育研究会 定例会
（みちしば特集号『生きる力といのちと死』 日本文教出版／秀学社、06年3月）
平成17年9月11日
（『いのちの教育の理論と実践』 金子書房、07年4月）
- ③ 『『チャッピーものがたり』をつくろう』
- ④ 核家族化が進み、家庭の中で祖父母が老いて亡くなっていくという場に立ち会うことが少なくなっている。また、2年生の子どもたちに死を見つめさせることは難しい。しかし、先輩たちからずっと引き継いで世話をしてきたうさぎが病気になり、ついには亡くなるという場に立ち会うことで、子どもたちにもいのちには限りがあること、でも忘れられない贈り物を残していつてくれることを学ぶことができた。
病を得ても凜として、闘病を続けたうさぎのことをもっと知りたくなってまとめ始めた「チャッピーものがたり」だが、悲しい終章が入って完成となった。この題材はその過程でいのちの学びを深めた子どもたちと教師の軌跡である。
- ⑤ 『『チャッピーものがたり』をつくろう』

今回の話題提供の資料は「みちしば」に寄稿する原稿を使って話題提供とさせていただきます。

（以下、講師が資料を順次読みながら、みちしばの原稿の2ページとその解説3ページの計5ページを要約して記録に代えることとする。詳細は発表者の資料を参照していただきたい。）

1. 子ども達に期待したこと

前年度からブックトークや死を扱った教材を通じていのちの尊厳性・有限性について考える機会を設けてきた。今回のうさぎの闘病にかかわったことで、いのちを慈しむ心を育てたいと願った。

2. 実践のあらまし

チャッピーとは、中伏木小学校で、毎年2年生が飼育して世話をしてきた10歳のうさぎで、平成17年、4月の下旬に老化による骨折で動くことも、自力の排泄もままならなくなり、弱ってきていた。

新しく2年生になった女子6人だけの学年で世話を始めていた。1学期のある日、小屋で動けなくなっているチャッピーを見つけ、子ども達とチャッピーとの闘病生活が始まった。全校に呼びかけて元気を回復させる方法も話し合った。

連休明けから薬の効き目も出てきた。お腹を押さえての排泄補助、スポイトで口から投薬など苦勞を伴う世話にも子ども達はチャッピーの気持ちになって真剣に取り組んだ。

子ども達の思いも通じてチャッピーは元気を少しずつ取り戻した。頑張り屋のチャ

ッピーについてもっと知りたくなり、物語を作ってチャッピーに聞かせてあげようと、6人で決めた。

まず、チャッピーが元気だった頃の様子を上級生や世話を担当された先生方に手紙を出して聞いてみた。その返事が届き、物語の構成を考えていた6月下旬のある日、チャッピーのお腹にウジがわいているのを見つけた。その除去に手を尽くして世話をしたが、ウジ虫が取りきれないのでチャッピーは入院することになった。その翌日、チャッピーは死んだ。学校では子ども達の緊急代表委員会を開き、お別れの会をすることにした。2年生6人は病院に冷たくなったチャッピーを迎えにいった。小さな白い箱に入ったチャッピーを抱いて帰った。

お別れ会の後、チャッピーの好きだった姫リンゴの木の下に子ども達の手紙も入れて埋葬した。

M児は手紙の中で「チャッピーがいなくなってさみしくなりました。チャッピーはみんなの手紙を読んできたかな。チャッピーが一番好きだったことは、外で楽しくぴよんぴよんとさんぼすることだと思います。わたしが学校に来てうれしかったことは、チャッピーがまたあるけるようになったことです。みんなチャッピーを学校のたからものだと思っています。チャッピー！いつまでもみんなをみまもってね、天ごくでも元気でいてね。たくさんがんばってきたね。いままでありがとう。チャッピーのこといつまでもわすれないよ。大すきだよ。」と書いている。

思ってもいなかった終章が入って「チャッピーものがたり」が完成した。それを6人みんなでお墓の前でチャッピーに読んで聞かせた。

子ども達の姿の中で最も心に残っているものは、チャッピーのおなかを我が物顔にはい回るウジ虫を「ここにもおる。取ってあげて。」と目に涙を浮かべて見つめている場面であった。悲しそうな眼差しや救いきれない辛さを同じように担任も感じながら、子ども達はいのちの尊さと重さをチャッピーの姿を通して学び取ってくれたように思う。

完成した「チャッピーものがたり」の紹介。何冊も作る必要上カラーコピーをした。

内容の構成は子ども達の言葉で、各自の書いた挿絵も入れて次のようなストーリーになっている。(既述との重複部分を多少除く)

いまから10年前に中伏木小学校にぴよんすけといううさぎがいた。年を取っていたそのうさぎは、ある日とうとうなくなった。子ども達はその死をととても悲しんだ。丁度そんなときに中伏木小学校にやってきたのは生まれてすぐのチャッピーだった。初めの1ヶ月は伏木保育園でお母さんウサギと暮らす事にした。やがて一人であそべるようになり、中伏木小学校で子ども達の人気者になっていった。時々カラスや犬に襲われそうになったが子ども達はそれを追い払って守った。チャッピーは「ウサギのダンス」の歌が大好きで、みんなで歌うと楽しそうに周りを跳ねた。穴掘りが得意で時には姿が見えなくなったこともあった。しかし年をとるほどにそれができなくなっ

ていった。

ある日校外学習から帰ると、後ろ足が骨折して立ってなくなっていた。それから子ども達の看病が始まった。

おわりにはお別れ会を計画し、この絵本をみんなで仕上げた。

この絵本はここまでの内容による構成である。

(ここで森田先生は子ども達の作った絵本を数部複製して出席者に配り、子ども達の文章を読み上げて内容を紹介された。)

9月号の学年便りには以下のような内容を紹介した。

8月初めに子ども達と一緒にこの絵本を伏木保育園に届けに行った。今から10年前にチャッピーのことを知っている方たちが3人現在も在職されていたのでその頃の様子も懐かしく聞いた。うさぎの出産時のこと、授乳のことなど興味深く聞いた。チャッピーのお父さんや兄弟の写真を見た。

絵本をチャッピーのお里である保育園に届けに来ることができて子ども達は満足げであった。

8月26日の登校日に、チャッピーのことや、また保護者の一人から新たにうさぎを飼わないかと提案があったことなどについて話し合いをした。

子ども達の殆どは直ぐまた飼いたいといった。しかしチャッピーのことを忘れられないひとりの子どもは「チャッピーがかわいそうだ。」と賛成しなかった。うさぎの世話をするという事は具体的にどのようなことか、みんなにできるかなど問いかけたりした。一人ぼっちにしたりすると寂しがって死んでしまうという子もいた。チャッピーのことを思い出して涙を流す子もいてもう少し考えてみることにした。

子ども達にとって、忘れられてしまうことが何よりつらいことだ、ということが話し合いを通じて感じられた。いのちはそれぞれが忘れられない贈り物をしていってくれるのである。この思いを大切に、また歩いて行ってほしい、と願う。学習発表会もこのテーマを扱う予定である。



子どもたちの手で作り上げられた「チャッピーものがたり」より